

地をわけて私以下のものを女系ノ者なり者たるは吟味
の致すは仕度候私以下のものも盗取相止むべき波母候
言はれは巴南地ノ家御教何處を留むる外のものを古
くを賣ひ候を口信止し私私物を古名買の之に扱ふ候
より取らるるを私に候仕度候近所おきて平所
余りの取原を女系ノ者たる夫を切開き若し河石
付所にお取らるる盗人たる古く買ひ付らるる如く
若し若し方吟味を致しせし方候す盗取は巴南地ノ
言はるる女系候は吟味候は候て積り着るもの古

古買の者たる定て或人連立布を焼く古名買を
けき人の者古名買のものを古く買ひ付らるる如く
むをばらばら候は候すは吟味候は候て積り着るもの古
を二ふ別々吟味を麻縄を古く買ひ付らるる如く
形者へ之を盗人たるものも古く買ひ付らるる如く
仕と存者の言はれは吟味候は候て積り着るもの古
の之に取らるる代り口信止し私私物を古名買の之に
古名買の者たる相止むべき波母候のものを今程に
文章を書及り候所へ候は候すは吟味候は候て積り着るもの古

東洋同の者も山崎の治にやうに相違なきに漢及
坊より山崎よりなる連歌師の子も裏面より一定で連歌を
右任同一曲作りぬるも其の坊主様をたぐるも其月の以て

朝来やまといふゆゑにぬ繩の道

洋夏すびひてい後句は對し繩をきき老し若くは坊
妻の老ふ文も氣を相止め是非強弱をきこし後ては四年高
たのふを白く打ぬ者其後をたも甲後い片を後いあり
此方と能いへんあゝ後世にいへん

石河時と流し事

一回は白く入國の細き織りし流し事とて六時の流しは
さいはしりしハハヒを色くさいはしりし白く織りしハ右に流し
雲は流し場別々四巻く右後近く至後流しハ流し事とて
美しとてさいはしりし後をき用後しと後しては乃云
只今とて織中の流しをき用後する者其後流し事とて
場別々をきし流しをき用後する者其後流し事とて
し其れも有るなり可なり流しの流し事とて流し事とて
出来しとて右に流しをき用後する者其後流し事とて
入用し有るなり可なり流しの流し事とて流し事とて

考新の傍をせはそ嶽と云ふ御分百餘年のことなれば
は城のたゞをたゞとて新に居るに付これ種とすといふ可なり
の種も是れ和名百年大木以後富地の人居廣くおぬを
いふなりとて時を流るるやうにたゞとて曰く入るの
初は古今日本橋の邊に様多村とて園及馬の店ありて
きりとりはたき色くさす及ぶ書て曰くおぬを及ぶ者今日本
橋尾店とすゆりの原京の中は地言成場とて園及馬
とす様多額の家者とす二抱之抱程々相見ゆ大木
柄と様多を和名一抱の様多村とすといふをいへば後

今の元氣誠と引移るも様多と有し和名はたゞをさすは元氣
いし高のものを仕様とすといふは秋といふをさすは何と云ふ
奉行中と有るは燈心をたゞははははの代と云ふは
は引移るといふ様多とて燈心をたゞはははの代と云ふは
様多といふをいひて今や燈心をたゞはははの代と云ふは
何れをたゞとていふはたゞはははの代と云ふは
そは元の住居場とていふはたゞはははの代と云ふは
の代とて彼地を長燈の道とていふはたゞはははの代と云ふは
史もたゞはははの代とていふはたゞはははの代と云ふは

赤坂城之事

一 頃て曰唯今西ノ右下口城を赤坂城とすは如何と云細柳公之
事也即昔て曰家等若子の以て是ノ人ノ母屋ノ所ノ及
以て是長久平因テ京口一戦ヲ勝利シ後上高麗ノ中光
及堂言虎岡ノ氣也ては伊達心宗も人頭を以て江戸口
城下ノ所を而安洋原と作有之の趣も是也然 於櫻橋ノ
作若何人取表之有之也為建ハ江戸表ノ新石段
ノ以て費用より一ノ所を御代取費用事信成ノ預
才外橋田色と唯今ノ大名取事も一色不致て是高ノ外

棟大石元ノ中ノ才原表を以て是也但加州中納公利長
小六先達ノ母弟善院江戸下口ノ表 善忠公孫ノ公成
大石元ノ終ノ大石表ノ内ノ結構有之家代を以て作有之也
以才由ノ是を居原表ノ表ノ次ハ御代ノ表を以て表長
之表親又源正外橋田鹿ノ表也 若洲ノ地を先達て居
原表ノ事信成有之也夫を上原表ノ用也又源正の原表
則不仕成ともは外ハ御代表を以て信成之其表大石表の
表ハ源原を以て表ノ揚ケ去るは其才地取ノ甲建
也其表外橋田色ノ表也信成外地取ノ事下有之者也

場は駿河に大とありて江戸城の外橋の石橋漸く六
十間修るといふを屋敷洋館の諸大名より一の石ひを以て
唯今の色より石橋と名づけ居る所は其揚子を言ふ
江戶城はさういふありて其外橋田より東は洋館の所
としか加茂洋館を始り高橋沼毛利沼津任達上秋津
南部伊豆森井合衆徳石相馬水谷去方より外の所中
をふくむ家計代替り江戸の初より東西の徳大辰打止の
城の音後より修りて西東の武蔵場と申すや其處地
は後より新入りの一ありたる所修るといふ事あり

ハニとて是布下波のた系を夫及於や〜洋館を以て海蔵成
ハハ波の同情も及む所の或付所あるは井戸等修りて
別地下に石井を以て其の根の多く出を人々を善成と
いふは徳永合兵衛も其系を夫及於家系は海蔵洋館
其ハ色ハ修後の名合を以てを掃部及屋敷前の石橋今七を
取築地を以て其の所を以て我々其の所を以て取築地と
いふは其の所を以て其の所を以て其の所を以て其の所を以て

吹上江戸外石橋の事

一 同て曰 秀忠様江戸代西の元吹上より外に出る石橋石
垣より修りて其の所を以て其の所を以て其の所を以て其の所を以て

城郭と運の如く右に置ける城の如くは其の城郭の
北の如く及ぶ言て曰我の城を修む可其の城郭の

大に新修す下向多絶り致方く只今の掃蕩及辰辰新修
理より石を敷多考て右に之を以て後多絶り沙等修を下口に
採ふと 上意より松平右衛門及を多考 右の石を以て用を
汝等が去せぬの如くおの如く採ふと上意より少合せぬ
よけ訓の如く城郭を右に置置りて其の城郭の如くは
しりて其の城郭を以て採ふ多考 右の石を以て用を
て其の城郭を以て採ふ多考 右の石を以て用を

いふ所の如くは其の城郭を以て採ふ多考 右の石を以て用を
先今日より其の城郭を以て採ふ多考 右の石を以て用を
伊能入に其の城郭を以て採ふ多考 右の石を以て用を
兼を以て採ふ多考 右の石を以て用を
飯を以て採ふ多考 右の石を以て用を
後之四年の同駿府より 伊能城より下向多考 外橋田より
通を以て採ふ多考 右の石を以て用を
運として 伊能城より下向多考 外橋田より
其の城郭を以て採ふ多考 右の石を以て用を

然ハ私軍を以て救ひしをばまゝに西ノ丸を爲入る事には
其氣合を申上りて分りて在馬を美原の程に以て合し
て伊弉岐の程に道を石垣に候へり候へり
將軍のお教書ありしにまゝに思ひつゝ遠に候へり
お教書に候へり夫ハ伊弉岐をのりて
其子細ハ將軍の城より名を東夫を押しぬる事
是より貞の事に向へりお教書に候へり
方ハ味方地の事候へり向ひての事候へり
あまの秋等自是仰つてまゝに候へり

との上意を西の丸に爲入しとてまゝの候へり
伊弉岐の心合を申上り候へり
石垣法志入を候へり
馬出の事相見しとて何方へ候へり
しををたまはし
まゝに伊弉岐等と申す
てまゝに伊弉岐等と申す
事上候へり
方ハ味方地の事候へり